

幌を廻ったのですが、浦幌がいいと言って郵便局の代理をしたりしていましたが、支庁の課長さんと会津の関係で、支庁長がその同期生なので、それで森林監守はイヤだと言って、フトンも家も全部作ってくれというようなことでやつたらしいんです。私も覚えているのですが、馬が牧場から十数頭も入ってくる気憶があるんですが、それは5～6歳のときだから、明治末年か大正の始めだと思います。一番気憶に残っているのは大火です。大正5年8月15日で、その日劇場に入っていて、皆の間をくぐって表へ出て、家ではみんな何もしないで私が来るのを待っていて、私が帰ってきて、色々な物を出したんです。ですから駅通関係もみんな焼けてしまって、辞令などは仏壇に入っていてそっくり出したから残ったんです。私は馬が10頭くらい出入りしたのかをかすかに覚えていました。中学1、2年のとき父が亡くなつて、大津藏之助さんはやかましい人だと聞いていたのですが、私の父と非常に懇意にしていたのです。1週間して学校から帰つて魚釣りに行って帰つて来たら、大津さんがちょっとこいと言つて、行つたら、おすわりさせられて香典帖を前にして説教された。内容は、十勝には父ほどの人はいないのに、お前は何をしているのかと、いうことでした。これが今も忘れられない想い出です。私はこうして、開拓当時の人達が集つて、その人とその声を残しておくということは、立派な行事だと思っています。

**荒木九平（栄穂）** 私は明治33年の秋北海道へ來

ました。そのとき、内地から出たわけです。その当時、髪を刈るバリカンというものがなかったのですが、郷里を出るときに、何もない所だからと思って床屋さんで見立て持つて来たんです。そして、「君、これはいいものを持って来た」と、言ってお盆だとお祭りに若い衆が5、6人集まりまして交代でやりあいました。その頃からバリカンが流行ってきたんです。そして、バリカンもこんなへつてしましました。

**中川政雄（吉野）** その当時、本当の荒山というか原野へ入られ、その木を倒して鍬を入れて、畑にして、初年度どのくらい開墾されたのか、それを聞きたいのですが。

**飛田辰次郎（本町）** 入地したのは明治31年4月です。ほかに明治29年に止若（幕別）に来て2年ほどですけど、土地が悪くて、浦幌が土地がいいと聞いて浦幌で土地をもらつたんです。その土地をもらう時分には、支庁は帶広にあったんです。そして、役人が大津旅館に行って、出張所を置いて戸籍謄本をつくつて年間を通じてお願ひする。すると、すぐに土地をくれるんです。そして、明治31年4月の雪解けにさみしく、見たことも、来たこともない浦幌へ来て、その日のうちに万年の石丸さんの隣へ、越中から來た人4、5人と一緒に浦幌の土地を見に來ました。

**中川政雄（吉野）** 限られた時間で話し足りないことがたくさんあったと思いますが、このような機会をまた設けて、良い内容を残したいと思います。今日は本当にありがとうございました。

## 十勝太古川遺跡の紡錘車

宮 宏 明

本稿では、十勝太古川遺跡の紡錘車を紹介し、併せて、その出土位置等から若干の問題について考えてみたい。

本稿をまとめにあたつて格別なる御高配を賜わつた後藤秀彦氏並びに実測図等で御助力いただいた森 秀之君に対して心から感謝申しあげる次第である。

十勝太古川遺跡は、Fig. 1 のように南側の第1地点に1号竪穴～7号竪穴が、北側の第2地点には、8号竪穴～13号竪穴が所在する。12号竪穴は、ブルドーザーによる整地の際、2/3程が削られ、失われてしまった。

本遺跡からは、紡錘車10点が出土している。そのうち、本稿では、形状の比較的良好なもの8点を紹介するものである。

Fig. 2 - 1 は、紡錘車の上面が皿状に剥離している。無文であり、直径は57mm、厚さは最大14mm程度である。孔径は6mmである。1号竪穴東側2.5m程のところから出土し、20個の礫の集石に近接する。集石の近くから出土したということは、何か意味ありげである。

1号竪穴は、第1地点の東端に位置し、竪穴の大きさは概ね3.6m×3mで比較的小さい。カマドは竪穴の東側に位置し、煙道の長さは1.2mほどである。床全面から木炭及びヨシの炭化物が出土したという（浦幌町教育委員会、1973）。

Fig. 3 - 2 の紡錘車は、ほぼ完形品である。3号竪穴のカマドの西側から出土した破片が接合したものである。無文であり、胎土には若干の砂が混入されている。直径は61mm、厚さは13mm、孔径は8mmで、重量は42gである。

3号竪穴は、第1地点の最も南端に位置する。大きさは5.2m×3.8mで、プランは歪な隅丸長方形を呈す。ほぼ中央部に焼土が検出されている他、2カ所に集石が認められている。

Fig. 4 - 3 は、30%ほどが失われている紡錘車である。直径は60mm、厚さは20mm、孔径は10mmほどである。放射状に平行沈線が施されている。おそらく、2本1組の平行沈線が8組放射状に施されていたものと思われる。焼成は良好で、胎土には若干石英が含まれている。Fig. 4 - 4 は、側面部がわずかに欠損している紡錘車である。焼成はきわめて良好で、胎土には若干の砂が含まれている。擦文土器にみられるような、ミガキが下面を除く、ほぼ全面に亘ってなされている。直径は、72mm、厚さは22mm、孔径は7mmほどである。側面には2条の沈線が施され、上面にも意図的な文様ではないが、整形の際のヘラ状工具による同心円状の沈線様の痕跡が、窺われる。

Fig. 4 - 3 の紡錘車は、カマドの南西から、Fig. 4 - 4 の紡錘車は竪穴の西側の床面からそれぞれ検出された。

4号竪穴は、2号竪穴と6号竪穴の中間に位置し（Fig. 1）、大きさは4m×4.4mである。竪穴南西の隅には、深さ1mほどのピットが検出された。

Fig. 5 - 5 は、完形の紡錘車である。直径は67

mm、厚さは18mm、孔径は8mm、重量は85gである。放射状にシダ状の文様が施されている。上面の周縁には、キザミを施すほか、図のように相対するシダ状文様の間に2本1組の平行沈線文が施されている。伴出土器の文様が反映されているものであろう。この紡錘車は5号竪穴の東側にきわめて近接して検出された。十勝太古川遺跡の概報（浦幌町教育委員会、1973）及び現場の図面にはFig. 5 のように、竪穴南西の床面から紡錘車が出土したとあるが、遺物の所在は不明である。小破片であるのか、土器底部の誤認（後藤秀彦氏談）であろうか。

5号竪穴は、6号竪穴の南東に位置する小さな竪穴である。大きさは、3.2m×3.4mである。

Fig. 6 - 6 は完形の紡錘車であり、直径は67mm、厚さは15mm、孔径は8mm、重さは47gである。放射状及び同心円状に爪形文が施されている。焼成は良好である。

Fig. 6 - 7 は1/4ほどを欠損した紡錘車である。直径は56mm、厚さは18mm、孔径は6mmほどである。文様は、放射状に植物の茎が何かで刺突したものようである。焼成は良好である。

Fig. 6 - 8 は、完形品で、直径は67mm、厚さは17mm、孔形は8mm、重さは62gである。シダ状文が放射状に四方に向かって施されている。

本竪穴から出土した紡錘車3点は、いずれも放射状を基調とした文様である。Fig. 6 - 6 とFig. 6 - 7 が2コ1組として使ったごとく近接して出土したこと及び、Fig. 6 - 8 の紡錘車がベンチの正反対から半分づつ出土したことは、偶然にしても、きわめて興味深い。

9号竪穴は、第2地点の中ほどに位置し、大きさは5m×4mでベンチ状を呈するきわめて稀有な構造を呈している。

擦文文化に伴う紡錘車のほとんどは土製である。鉄製・石製・木製・骨製等は、ほんのわずかにすぎない。最も木製などが多くたとしても遺物として残っている事例が少ないからであるともいえなくもない。しかし、紡錘車の機能面から考えると、ある程度の重量が必要であることはいうまでもない。古墳時代の遺跡から出土するものの多くは土製あるいは石製の紡錘車である。碧玉製ある

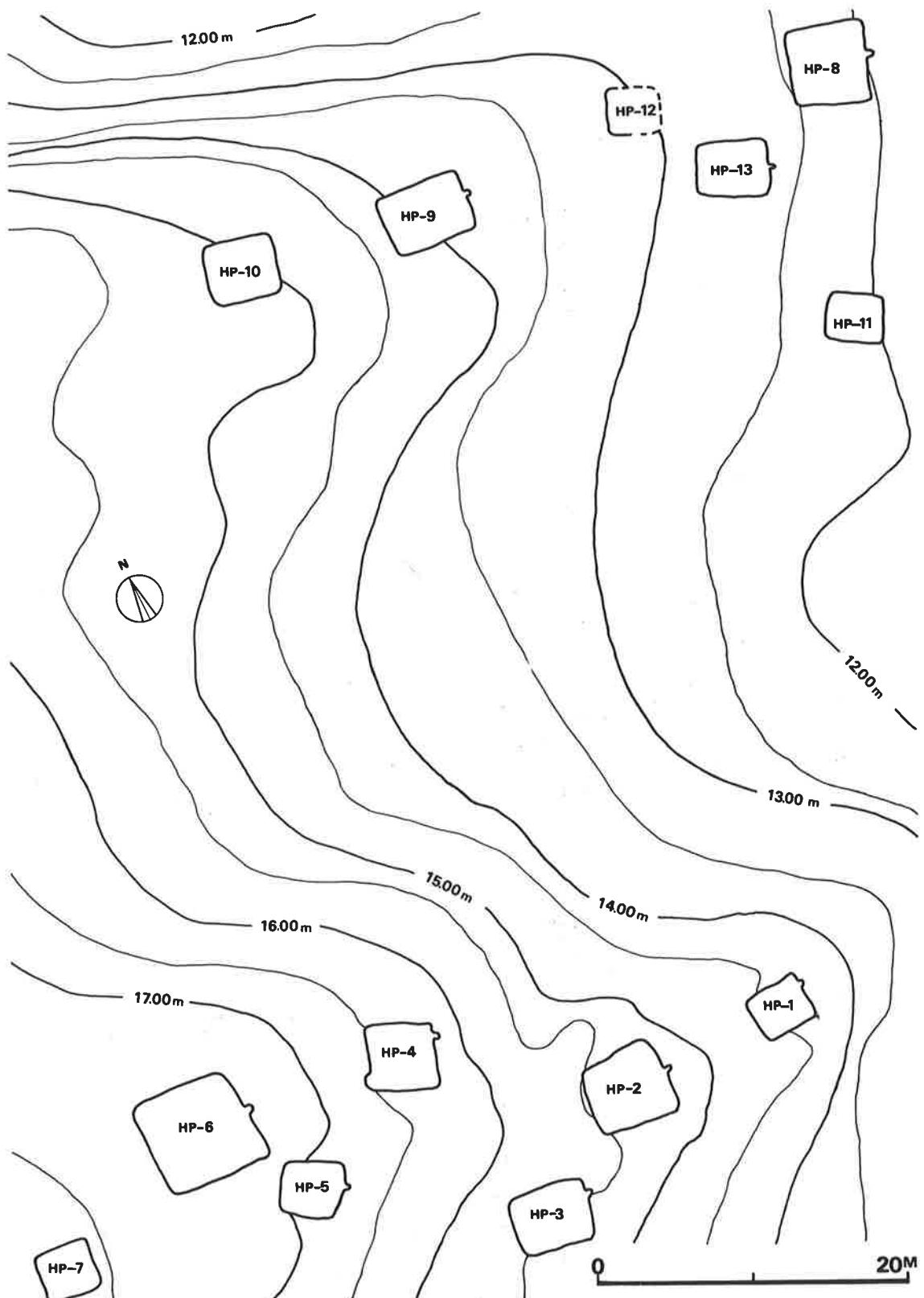


Fig. 1 十勝太古川遺跡地形測量図（縮尺 1:400）

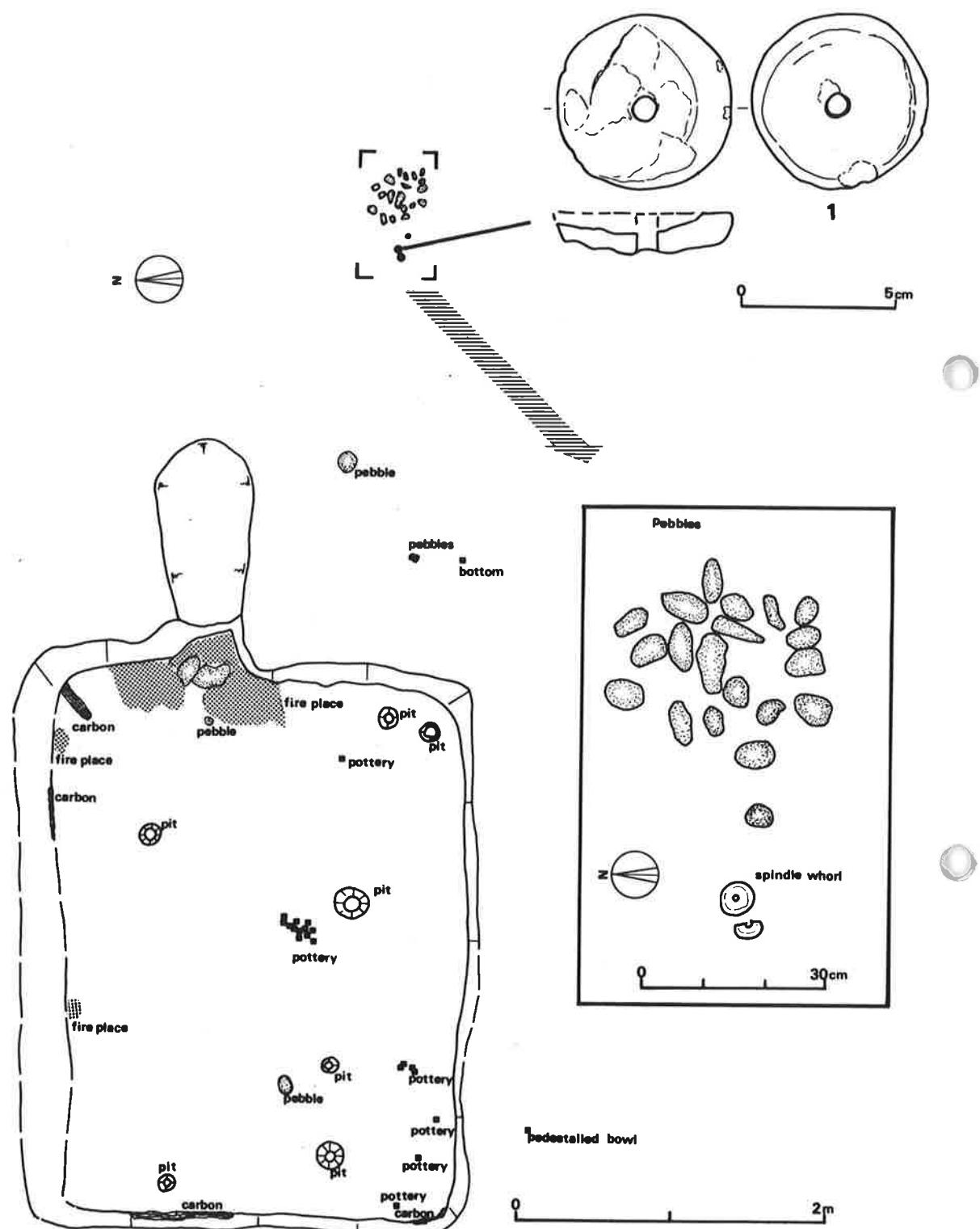


Fig. 2 1号竪穴検出状況と紡錘車の出土位置 (縮尺 1:40)

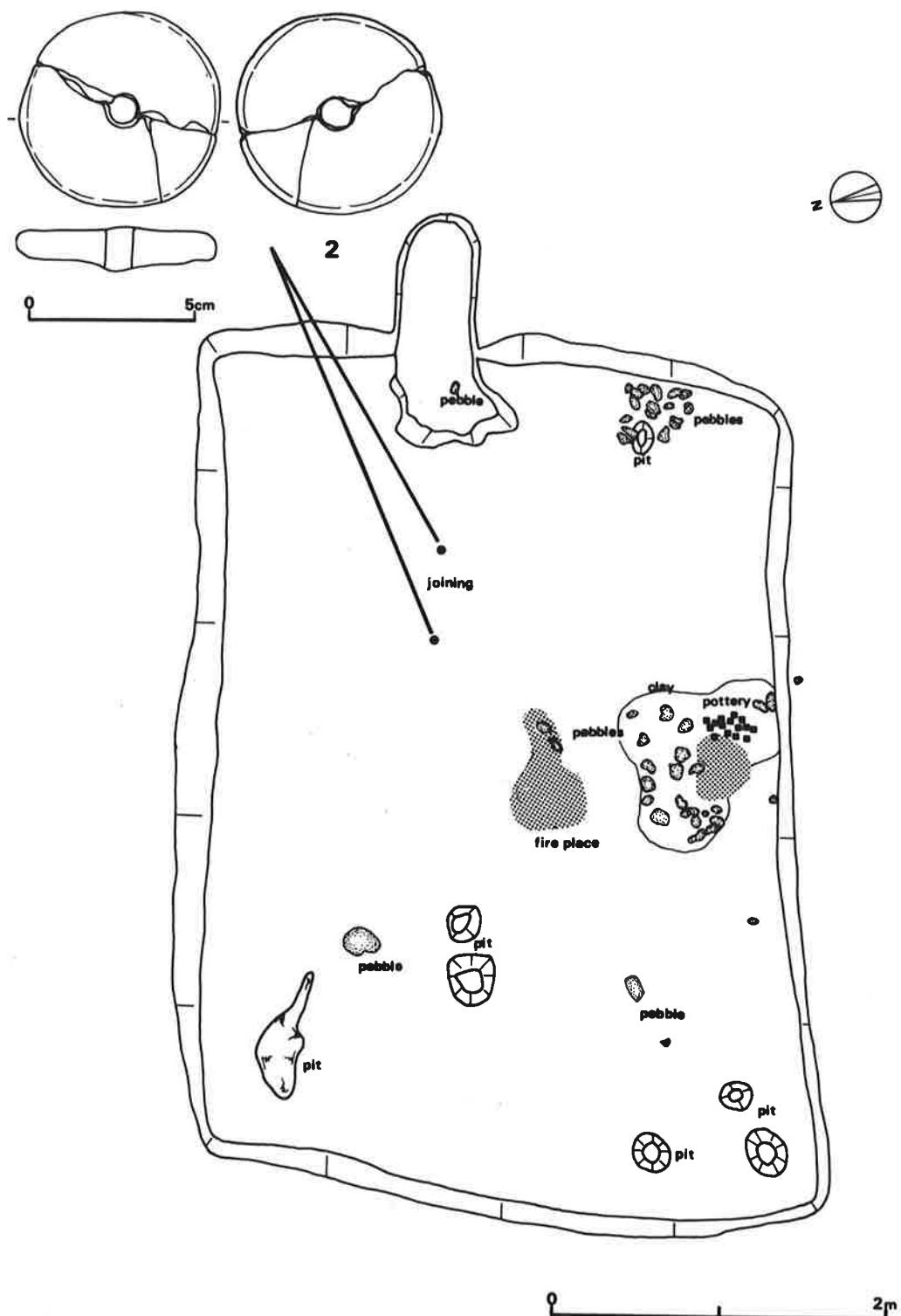


Fig. 3 3号竪穴検出状況と紡錘車の出土位置 (縮尺 1:40)

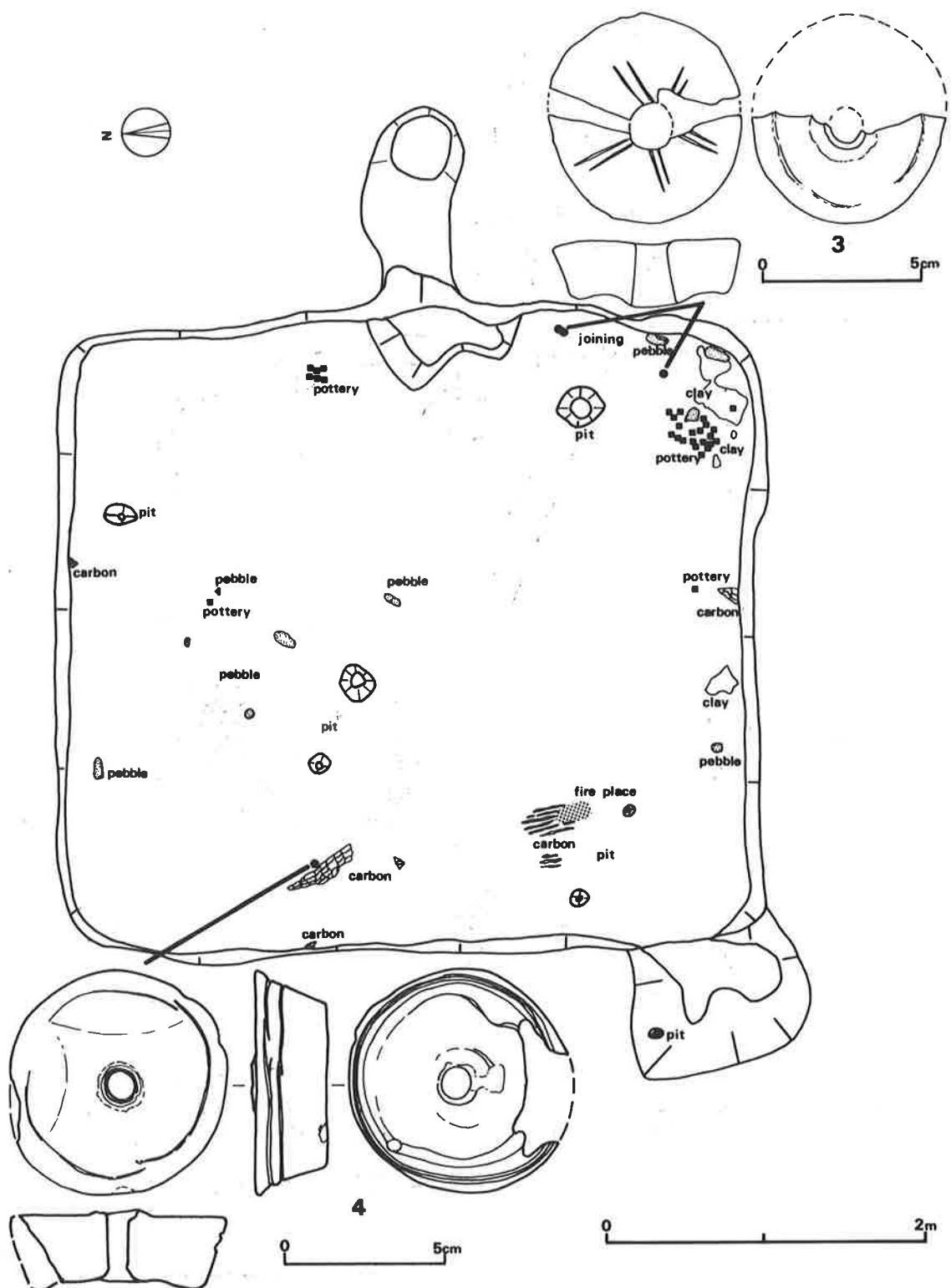


Fig. 4 4号竪穴検出状況と紡錘車の出土位置（縮尺 1:40）

いは滑石製のものが知られている（杉原莊介、1962）。

民族例等からも、紡錘車は女性の道具であると言つても過言ではあるまい。女性の道具であるとすれば、住居址において紡錘車の残された位置は、何らかの移動がないかぎりにおいて女性の住居における衣に関する作業空間を示しているものと思われる。紡錘車の出土位置を過信することに危険

はあるにしても、紡錘車が専ら使用されていた場所、あるいは、置かれていた場所が出土位置に反映されていると考えるべきであろう。

十勝太古川遺跡の場合も土器の出土する位置(多くの場合、カマドの周辺部)とは異なる位置に残されていた場合が多い。4号竪穴は、その例外であるが、9号竪穴などは、まさに、調理空間とは全く反対であるといえよう。そのうえ、9号竪穴

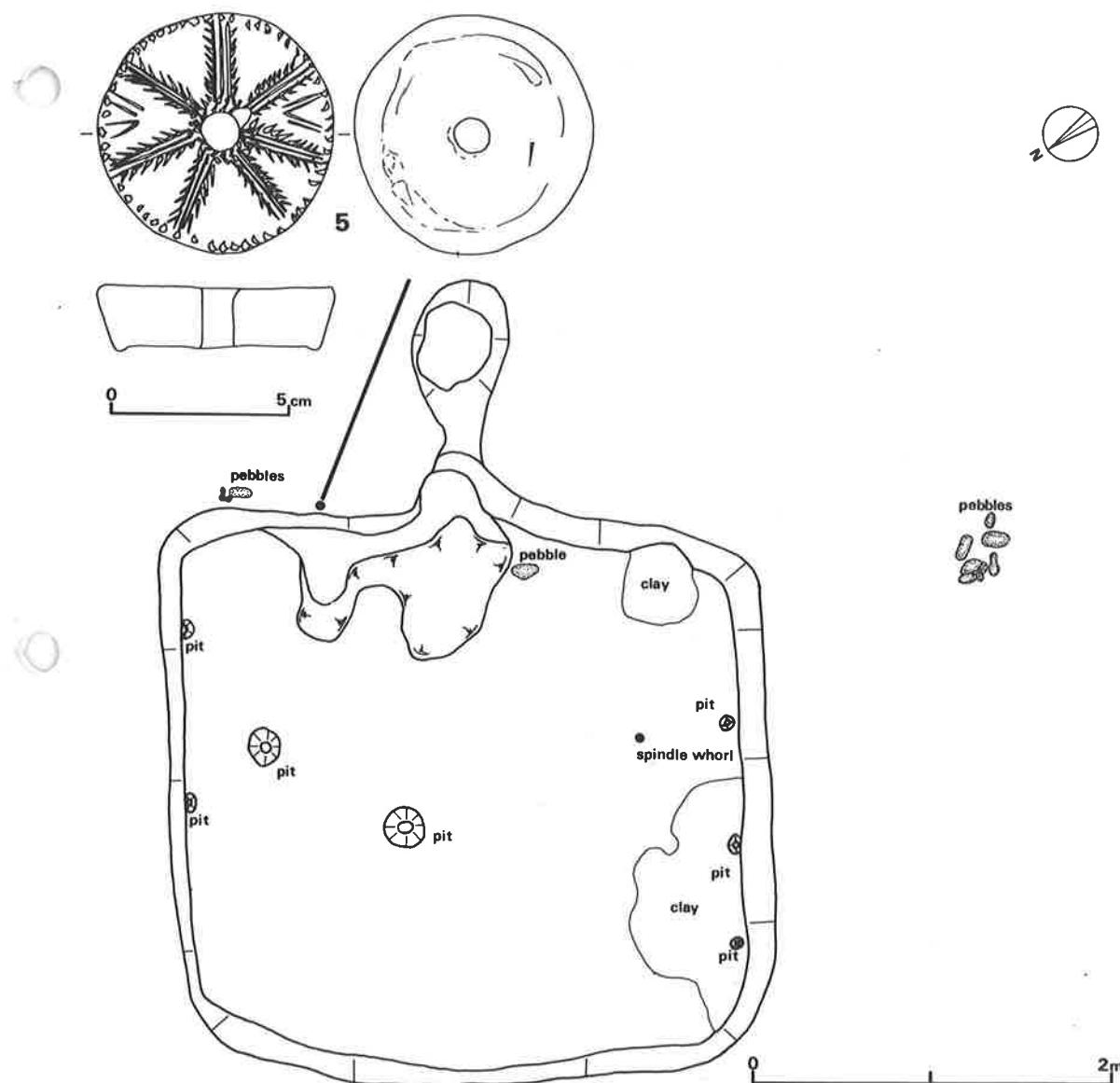


Fig. 5 5号竪穴検出状況と紡錘車の出土位置（縮尺1：40）

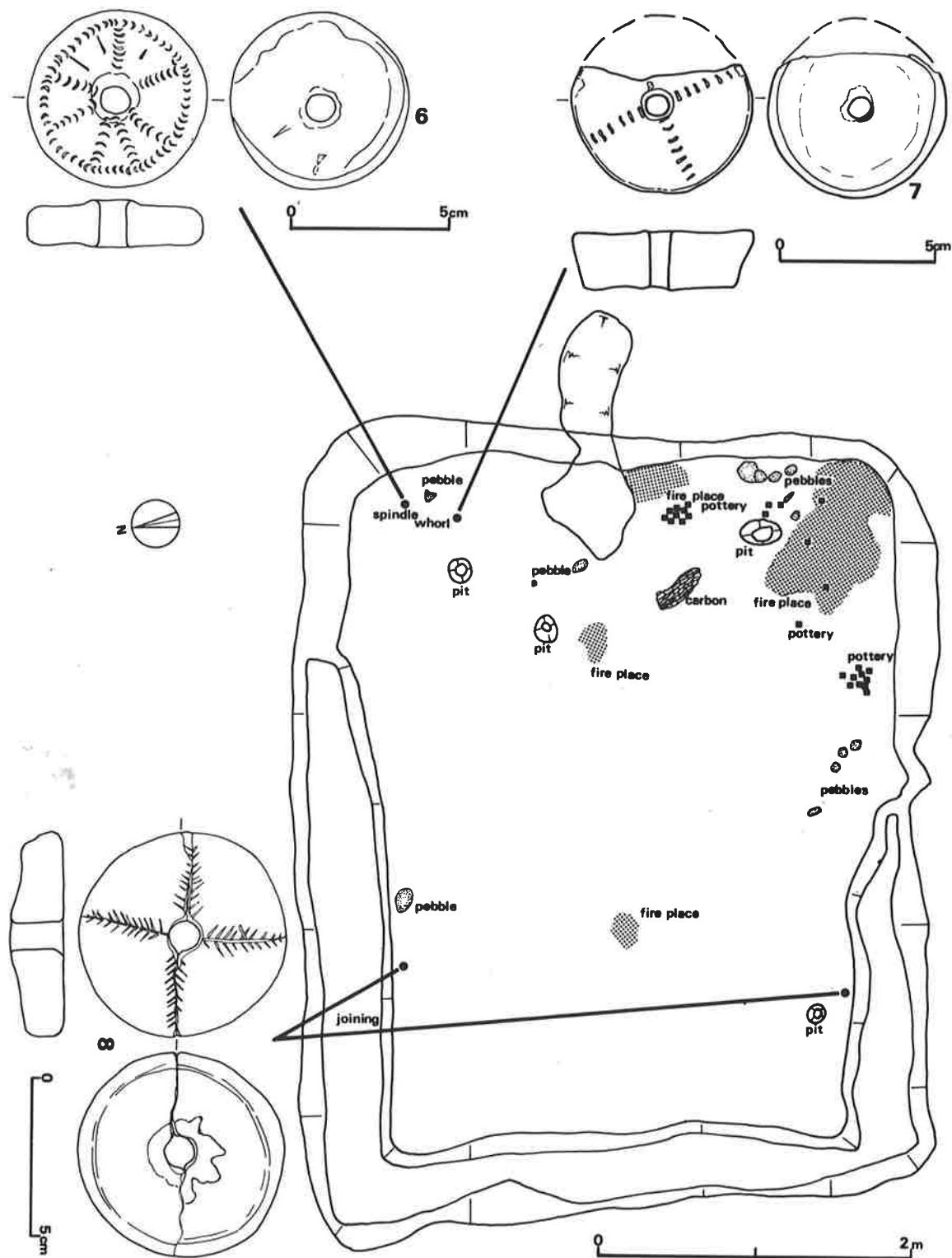


Fig. 6 9号竪穴検出状況と紡錘車出土位置（縮尺 1:40）

出土の6及び7の紡錘車は、2コ1組で使用したかのごとくである。他の遺跡の擦文住居に伴う紡錘車の出土位置も多くは、土器の出土位置とは異なる事例が多いようである。これは、やはり住居内における作業空間の違いを示していよう。

詳細に亘る分析については、稿を改める所存である。多くの方々からの御批判並びに御教示を切願し、擱筆するものである。

(日本考古学会員)

### 参考文献

- 浦幌町教育委員会 1973 『十勝太古川・若月遺跡発掘調査概報—第1次発掘調査—』  
3頁～9頁  
杉原莊介 1962 「紡錘車」『日本考古学辞典』  
493頁 東京堂出版  
藤本 強 1982 『擦文文化』 137頁～141頁  
教育社  
八幡一郎 1968 「北海道の紡錘車について」『北海道考古学』第4輯 11頁～20頁 北海道考古学会

## 浦幌町で発見したチャシ2例

### 後藤秀彦

北海道内に所在するチャシ跡の分布調査は近年精力的に進められ、ここ数年のうちに発見され、周知されたチャシ跡も少なくない。筆者らも、主に十勝管内を中心として鋭意調査に当ってきたところであるが、最近浦幌町内で2基のチャシ跡を発見する機会に恵まれたので、ここに報告する次第である。

なお、このチャシ跡発見に当たり、現地案内をお願いした斎藤兵一郎および大坂千代人氏に心からお礼申し上げるとともに、平素からご指導賜っている石橋次雄・澤四郎の両先生に感謝したい。また、この調査に同行して下さった厚内公民館主任佐藤芳雄氏にもお礼申し上げる。

#### 1. アツナイチャシ跡

浦幌町字厚内1番地および9番地に所在する。筆者は、前記した佐藤芳雄氏の通報により現地を尋ね斎藤兵一郎氏の案内により確認することができた。1980年秋のことである。その後、翌1981年5月北海道教育委員会の「埋蔵文化財包蔵地分布調査」(調査者:高橋和樹・長沼孝・田才雅彦)の際、同行し、再びこのチャシを踏査した。

最初に現地を案内してくれた斎藤兵一郎氏によれば、昭和初期に長男誕生の際に植林したときに発見したものと言い、その際「これはチャシだ」と確信したという。

チャシは、白糠丘陵の最西端部に所在し、西面

したいくつかの急峻な屋根のうちのひとつに築造されている。標高は約40m、比高は約30mである。チャシはこの屋根を真上に昇った、やや傾斜のある部分に築かれ、尾根部を切断するように長さ20m、幅6～7m、深さ4mの壕が構築されている。主体部は22m×12mで、その中に2つの竪穴様のくぼみが残されている。壕からはチャシの側面および前面に浅い壕又はテラス状の遺構が残され、その平面形は丘先式のチャシに、側面形は丘頂式のように見える。

このチャシからの眺望は良く、左手に太平洋を臨み、眼下には厚内川が右手から左手に向かって流れている。

#### 2. チプネオコッペチャシ跡

浦幌町字オコッペ76番地に所在する。1981年5月の「埋蔵文化財包蔵地分布調査」の際、通報してくれた大坂千代人氏の案内で現地踏査したものである。

チャシ跡は、太平洋から直線で2.5km奥地へ入ったチプネオコッペ川にチプネ二の沢川が合流する地点に築造されている。この両河川とも小流であるが、周囲の山が急峻なためひとたび雨が降ると、一時に水量が増し、時には流路を変更することもある。

チャシはこの両河川の合流点に狭まれるようにして所在している半独立の平面橢円形の小丘上に